

姪奴と甥奴（前編）

繁殖奴隷にされる姉と
男の娘に改造される弟



濠門長恭

目次

登場人物	- 3 -
0 . 特別閉鎖病棟	- 4 -
2 . 筆下ろしと初アナル	- 80 -
3 . 馴致の始まり	- 138 -
4 . 閉ざされた逃げ道	- 190 -
5 . 実技教育	- 235 -
6 . 歪な日常	- 273 -
後書き	- 309 -

登場人物

近藤悠莉愛

1年生

ノーマルな性的指向の持ち主（と、自分では思っている）。

ぎりぎりCカップ。

今年の夏にナンパされて、経験人数1。

近藤尋海（広美）

悠莉愛と3歳違いの弟。姉が初体験したと同じ頃、精通を経験。

未発毛。Hな事柄には興味津々。M性向有り？

近藤華枝

在学中に妊娠が発覚して中退。両親の強制で、別の男と結婚させられて悠莉愛を産む。尋海は、その男とのあいだの子供。

出城勇介

華枝の兄。建設会社社長。引退した両親は海外で余生を楽しんでいる。勇介の性癖に愛想を尽かした妻は、東京の進学校に行ったひとり息子の世話を口実に東京で暮らしている。事実上の離婚状態。

前田真帆

高給で釣られて住み込みの「猥婦」をしている。マゾっ気は強いが、年下に対しては（男女を問わず）サディスチンの一面も。

津村和臣

悠莉愛と尋海を調教するために、SMサークルの紹介で雇われた。ドSのバイセクシャルだが、とくに少年を好む。過去にはウリの経験も有り。

0. 特別閉鎖病棟

窓に鉄格子の嵌った、淡いピンク色の小さな部屋。裸の女が四つん這いになって、腰を揺すっている。

「うああ……いい！ いっちゃうう！」

女は点滴スタンドを横倒しにして跨っている。太い丸みを帯びた三脚の一本が、女の股間に突き刺さっていた。

「うあああ！ もっとはげしくついてよう！」

ずちゅずちゅ……湿った音が女の股間から間断なくこぼれる。

女はショートボブを振り乱して、激しく腰を上下させ、快感を求めて前後左右にくねらせている。

バタン！

ドアが開いて、セーラー服姿の少女が部屋に駆け込んだ。

「やめて！ ママ、やめてよ！」

声をかけられても、女は振り返りもせずに腰を振り続ける。

「やめてったら！ 悠莉愛よ。ねえ、わかる？」

肩を揺すられて、女が動きを止めた。ゆっくりと、数秒をかけて少女を振り返った。

「ゆりあ……なの？」

女は霧を眺めるように少女の顔を見た。

「そうよ、悠莉愛よ。尋海も来てるのよ」

だぶついた詰襟学生服の少年が、恰幅のよい中年男に押し出されるようにして、姉の横に並んだ。顔をそむけて、無言。

少年のほうはそれほどでもないが、姉の顔は母親に瓜二つだった。ショートボブとポニーテール。髪形を同じにすれば見分けがつかなくなるほど——母親は若い。

「このひとねえ……すごく、かたいの。ママをなんどもなんどもイカせてくれるの」

女の目には、点滴スタンドが筋骨たくましい男にでも見えているのだろう。

「ごめんなさいねえ。このこたちはきにしな

くていいわ」

裸の女が点滴スタンドに語りかけ、膝を使って腰を上下に揺すり始めた。

姉弟が物心ついたときからそうだったように、今も無毛の股間に、太く硬い異物が入り出す様が、はっきりと見えた。

「くううう……いい。おっぱいももんでよ。おまめちゃんもつねってえ！」

口走りながら、それを自分の手で実行する。

その狂態を呆然と眺めていた少女が、ぱつと身をひるがえして部屋から逃げ去った。

「あ……」

少年も我にかえって姉を追いかける。

スーツ姿の中年男は、悠然と姉弟の後について行く。

病室のドアが閉じられて、女の嬌声も締め出された。

「見ないほうがよかったんじゃないかな？」

中年男が姉の背中に声をかけた。

少女は振り返って。

「母は……ほんとうに、正常に戻れるんでしょうか？」

男に質問した。

「私が責任を持って治療にあたります」

三人の様子を見守っていた白衣の男が声をかけた。スーツの男よりは歳を食っている。

「当院ではアメリカ精神医学会の最新マニュアルに沿って、治療を行なっています。保険適用外の医薬品も、出城さんの御要望どおり、費用を気にせずに使っていきます。医療刑務所では不可能でしょうが、ここでなら、必ず近藤華枝さんを完治させて、覚醒剤とも縁を切らせます」

中年男に話しかける態を装って、言外に姉弟を不安がらせるような物言いだった。

「よろしくお願いします」

少女が、医師に向かって頭を下げた。それから。

「いろいろとご迷惑をかけますが、どうか、母のことをよろしくお願いします」

出城に向き直って、よりいっそう深々と頭を下げた。

「もちろんだとも。では、納得したんだね？」

「はい。伯父様のおっしゃるとおり、お世話になります」

伯父——つまり、この男は悠莉愛たちの母親の兄なのだが、少なくとも容貌は、まるで似たところがなかった。

母親は、いわゆるうりざね顔で、化粧をすれば二十代前半で通用するほどだった。それに比べてこの男は、野球のホームベースに太い眉と分厚い唇が貼り付けられている。

その太い眉が少しだけなごんで、分厚い唇の端がちょっと吊りあがった。

「身の回りの整理もあるだろうから、うちに来てもらうのは来週の金曜日にしよう。和臣くん——車を運転していた青年だ。彼にも手伝いに行かせる」

「はい。よろしくお願いします」

もう一度、少女が頭を下げる。弟も、それ

にならった。

四人は廊下を引き返し、カードロック式の扉を開けて、その先のエレベーターに乗った。医師だけが途中で下りる。

1階のいちばん奥に隠されているエレベーターを降りて、迷路のような廊下を通って、玄関へ出る。

黒塗りのセダンが三人の前で停まった。運転席には、出城よりもがっしりした体躯の青年が座っている。

「きみたちは、先に帰りなさい。僕は、まだ先生と話がある。和臣くん、二人を送ってやってくれ」

「先輩は？」

「タクシーで帰る」

出城は姉弟を追い立てるように車に乗せた。車が動き出すと、見送ることなく背を向けて、病院へ引き返す。

姉弟の母親である近藤華枝は、覚醒剤所持

と使用の現行犯で逮捕された。だけでなく、販売目的所持と売春斡旋の容疑も掛けられている。つまり。自分が主催した乱交パーティーに覚醒剤を持ち込んで参加者ともども使用していた現場に踏み込まれたのだった。

悠莉愛はインターネットで弁護士に無料相談したが、懲役八年くらいが相場だろうと教えられた。

近藤悠莉愛と尋海の姉弟は、途方に暮れた。というよりは、呆然自失に陥った。

母と子の母子家庭で母がいなくなれば、だいいちに生計が成り立たない。唯一の保護者が刑務所に入れられてしまえば、姉弟は施設に保護されるだろう。姉が学校を辞めて働くという道もあるが、身寄りのない少女を雇うところがあるか疑問だった。

そんな窮状に救いの手を差し伸べたのが、出城勇介だった。華枝の兄、姉弟の伯父だというが、ふたりは彼の存在をまったく知らなかった。

建設会社のオーナー社長である勇介の行動は迅速で強引だった。

私選弁護人を雇って、まず保釈を勝ち取った。そして、覚醒剤中毒の治療のために精神病院へ入院させた。

「無罪は無理だが、執行猶予は可能だ」

勇介は自信たっぷりに言う。私選弁護人の説明によると――

被告は完全に覚醒剤をやめられる、再犯の虞おそれがないと、裁判官の心証を形成する必要がある。じゅうぶんな治療はもちろんだが、退院後も華枝を後見する人物が必要だった。

「退院後は、親子そろって出城家で暮らしてもらおう」

勇介は、それが既定の事実であるかのよう
に断言した。

言葉だけでは、裁判官への訴求力が弱い。すでに姉弟は勇介と同居しているという実態が必要だった。

「明日にでも、うちへ来なさい」

姉弟は、いきなりの話に面食らった。伯父とはいえ、これまで一度も会ったことのない男の家族と同居するのは気が進まなかった。

しかし、賃貸マンションは近いうちに退去しなければならない。施設に保護されるか伯父の家族と同居するか、どちらかしかない。

母の狂態を見せつけられて、医療刑務所では正気に戻せないなどと脅されては——姉弟は伯父の提案に従うしかないのだった。

勇介は、特定の職員しか持たされていないはずのカードを使って扉を開け、特別隔離区画にはいった。名札の出ていない病室のひとつを、迷うことなく開ける。

華枝は、おとなしくベッドに寝ていた。手足を大の字に引き広げられて、ベッドの四隅に取り付けられた革枷に拘束されている。腰の下に分厚いクッションをあてがわれて股間を突き出した姿勢で、膝、太腿、腰、胸、両肘、そして首にまでも太い革ベルトがぎちぎ

ちに巻き付けられている。彼女が動かせるのは、頭と指先だけだった。

そんな扱いを、華枝は黙って受け容れている。口には大きなボールギャグを嚙まされているのだから、言葉を発せない。

華枝への処置は、まだ終わっていなかった。姉弟に母親の治療を安請け合いした医師——この病院の院長が、華枝の身体に電極を取り付けていく。乳房と脇腹と太腿と鼠蹊部と、クッションで浮かされた尻には湿布のような金属箔を、乳首とクリトリスにはバネを弱めてある小さなクリップを。そして股間には。直径五センチほどもある金属棒が——経産婦とは思えないほど色素沈着の少ない小ぶりな肉襞を割って奥深くまで挿入された。そのすぐ下にも、ひとまわり小さな金属棒。

「んんんん……」

華枝がくぐもった呻き声をあげたが、苦痛に喘ぐといった感じではなかった。

「ずいぶんとおとなしくなりましたな」

勇介が妹の顔を見ながら言う。

「瞬間興奮剤は、すぐに醒めます。もっとも、抗うつ薬も持続性の脱法ドラッグも、まだ効いていますかね」

つまり華枝は、極端な躁状態にされたうえに性的興奮を瞬間的に高める薬まで投与されて——子供たちの前で狂態を強制されていたのだ。壁には強化ガラスで保護されたワイド画面が埋め込まれているが、直前まで違法ポルノが映されてもいた。これだけの処置をされれば、処女でさえも点滴スタンドの脚を股間に突っ込んでいたかもしれない。

「薬が切れるまで甦る趣向ですか」

「とんでもない。見事に大役を果たした主演女優には、それなりにボーナスを与えます」

ベッドの脇には、タワー型PCほどの装置がキャストに乗せられている。医師は、電極から伸びるコードを装置につなぎ込んだ。

「薬効が切れるどころか、明日の朝までも天国に逝かせてやりますよ」

医師が装置のスイッチを入れると、華枝の裸身がびくんと跳ねた。

「低周波をメインにして、高電圧はスパイス程度に」

全身の筋肉が低周波のリズムに合わせて、びくんびくんと跳ね続ける。

「ん……んっ……んんんん」

呻き声は甘く切迫していた。

点滴スタンドから得ていた局所への苦痛を伴う荒々しい快感ではなく、骨まで蕩かされるような純粹の快感を、華枝は全身で感じている。

もっとも。乳首やクリトリスのクリップ、そして二本の太い電極に高電圧を流せば、華枝を壮絶な電撃地獄にのたうちまわせることもできる。

至高の快感と究極の地獄。ふたつを使い分ければ、どんな女でも従順なマゾに馴致できると、この医師は豪語している。事実、彼はこれまでに二十人ちかくの、初潮前の娘から

更年期の女まで、はては男の娘もマゾ奴隷に仕立ててきた。華枝も七年前に、ここでマゾ堕ちさせられている。

ほとんどの「特別隔離治療」は、クライアントから高額で受けた依頼だったとはいえ、専用の区画を設けて専任のスタッフも雇っているのだから、費用は持ち出しになっている。つまりは趣味なのだ。その証拠に、どれだけ札束を積まれても筋骨逞しいノンケの男は受け付けていない。

「んんんんっ！ んん、んんん……」

嚴重に拘束された身体をひくつかせ、頭を激しく左右に振りながら、華枝は絶頂に向かおうとしていた。

出城は、そんな妹の淫惨な姿を冷やかに見下ろしている。

「上野先生はフェミニストでいらっしゃるが、こんな女は……」

床に転がっている華枝の室内履きを勇介が拾いあげた。

「こっちのほうを悦びますよ」

妹の股間を突き刺している太い電極に室内履きを叩きつけた。

バシン！

「んぐぶふーっ！！」

膣奥を突き破るほどの衝撃に、華枝は封じられている声が許すかぎりに叫んだ。全身を激しく痙攣させると、どすんと腰をクッションに打ちつけて、そのまま動かなくなった。

「なるほど……脈拍も膣圧も一気にレッドゾーンまで振り切りましたな」

電気刺激装置の横に置かれたモニターを見て、苦笑する上野。

華枝の裸身には、電気刺激のための電極だけではなく、各種のバイタルセンサーも貼り付けられている。電気刺激装置はその値をモニタリングしながら、あらかじめプログラムされているパターン（性的陶酔もあれば肉体的激痛もある）に追随するように、刺激を自動制御している。

上野の言うレッドゾーンとは、制御プログラムには禁じられている極端な快樂ないし苦痛だった。

「念のために強心剤を入れておきましょう」

彼は点滴スタンドを本来の目的に使った。

「患者が意識を回復すれば、Heaven & Hell Trainer も作動を再開します。それはモニターで見ることにして、軽く一杯いかがですか」

出城をうながして、返事を待つ。歳は上野のほうがひとまわり上だが、出城はクライアントというだけでなくスポンサーの一人でもあった。

「そうですね。放置プレイといきましょう」

出城が先に立って、病室を出る。

「もしも、お手に余るようでしたら、いつでも入院を受け付けますよ」

出城に並びかけて上野が営業トークめいたことを言う。

「まさか。二度とは得られん獲物だ。じっくり料理してやる。華枝のときみたいなへまは

せんさ」

「それでは、お手並み拝見といきますか」

二人のサディストは、顔を見合わせて冷酷に唇を歪めた。